

令和6年度 学校経営計画及び学校評価

1 めざす学校像

「優しいチカラ」と「社会につながる学力」を育てるインクルーシブな総合学科高校
人を思いやり、自分を鍛え、未来を描く「優しいチカラ」とピア（仲間）や世界から学び「社会につながる学力」を育みます。そして、お互いの
人権と多様性を認め、誰もが自分の居場所のあるインクルーシブな学校をめざしています。

2 中期的目標

- 1 スクールミッション・スクールポリシーにもとづく教育活動の進化と学習者主体の授業実践
- (1) 建学の精神（3原則「一切の差別を許さない学校」「落ちこぼれを許さない学校」「地域に根差した学校」）をふまえたスクールミッション・ス
クールポリシーの定着を図る

令和6年度から学校運営の中核となるスクールミッション・3つのスクールポリシーにもとづいてあらゆる教育活動を行う。
- (2) 学習者主体の授業を行う。

ア 松高総合学科「ライフワーク」（「産業社会と人間」「課題研究」「論理コミュニケーション」）によって、学びのベースとなる「学び方を学ぶ」（メ
タ認知の力）プログラムを展開する。入学時より、社会の現実をテーマに、主体的に関わり、協働し、伝え、振り返るプロセスを積み重ねる。

イ 校内の授業充実のシステムとして、春秋の授業見学週間及び授業充実研修を通じて授業力向上を図る。ユニバーサルな授業づくりとして「視覚
化・構造化・協働化」を大切に、授業設計の視点「GOLDEN」理論にもとづいて単元を逆向きに設計し「問いの変換」を組み入れながら授業を展開す
る。あわせて、ICTを活用した基礎的環境整備、「1人1台タブレット」の活用による学びの充実を進める。

※生徒向け学校教育自己診断における「分かりやすく集中して勉強できる授業が多い。」の肯定的回答を令和8年度まで80%以上を維持する。(R3：
79.1%、R4：72.9%、R5：79.3%)「教え方に工夫している先生が多い」の肯定的回答を令和8年度まで、80%以上を維持することを目標にする。
(R3：83.3%、R4：79.2%、R5：87.3%)
- (3) 高等学校における通級指導教室および自立支援コースの授業の内容創造によって自立できる力を育てる。

ア 7年めとなる通級指導教室の授業「ライフスキル」の内容深化を専門家参加による通級チームによって行い、発達障がいをはじめとする支援の
必要な生徒に対しソーシャルスキルの獲得と社会的自立を促進する高等学校段階でのカリキュラムの充実を図り、自立支援コースの指導のノウハウ
を生かす。

※通級指導を受けた生徒の満足度を令和6年度80%以上を維持する。(R3：100%、R4：100%、R5：100%)
- 2 お互いの人権と多様性を認め、誰もが自分の居場所がある人権教育・インクルーシブ教育の推進
- (1) 生徒が主体となるピアエデュケーションを大切にした人権教育プログラムづくり

ア 1学年のHR合宿を契機に信頼できる居場所づくりによって、違いを認め合い、自己開示ができる関係づくりを人権学習の基本に置く。

イ 当事者との対話、生徒どうしの対話を重視したピアエデュケーションを実施し、生徒誰もが当事者として人権学習に取り組む態度を養う。

ウ 2年次海外研修旅行や海外オンライン交流によって、同世代の高校生や市民との交流を進め、多様性を認め合う態度と行動を育てる。

エ 「仲間の会」「るるく」「ピアカウンセラー」「松高きっちん」「スタディツアー」「ピースワーク」等の自主活動、小中学校等の出前授業等を行う。

オ 教職員の人権研修を更に充実させ、校外で受講した研修については、成果を校内で還元する。

※生徒向け学校教育自己診断における「さまざまな人権や命の大切さを学んだ。」の肯定的回答を令和7年度には90%以上を維持する。(R3：94.2%、
R4：85.2%、R5：94.4%)
- 3 生徒支援と地域連携のための学校内外でのネットワークづくり
- (1) 教育相談担当者会議を中心とする支援ネットワークの体制づくり

ア 教育相談担当者会議を毎週開催し、人間関係や心理的な課題への配慮、虐待などによる社会的支援の必要な生徒の情報を共有し、各学年、学校
全体への周知を図る。ケース会議の開催によって本校SC、SSWや福祉機関、NPOとの連携を図り生徒支援を行う。

イ 課題を抱える生徒フォローアップ事業等を通じ、地域NPOと連携し、「松高きっちん」（松高版子ども食堂）など生徒への居場所の提供と生徒た
ちのエンパワメントにつながる機会を保障する。

ウ 学習への基盤となる基本的な生活習慣の確立につながる支援を行う。
- (2) 自立支援コーディネーターを中心とする障がいのある生徒支援

ア 自立支援コース、通級指導教室の生徒のニーズの把握と学習支援の課題を共有し、障がいのある生徒のトータルな支援をコーディネーターなど
と教育相談委員会、学年と連携して行う。

イ 高等学校支援教育力充実事業の支援教育サポート校として、教育実践の一層の充実を図り、他校への発信と支援の充実を引き続き行う。
- (3) 各中学校との連携を深め、中学校訪問、出前授業、生徒情報交換の機会を充実する。
- 4 総合学科としての多様な進路実現に向けたキャリア教育の推進
- (1) 総合学科のシステムを活かしたキャリア教育を実施し、生徒の多様な進路実現を図る。

(2) 採用と人権・統一応募用紙の精神をふまえ、高校生の権利を守る進路保障を行う。

(3) 看護・福祉・保育・教育を中心に実習体験を拡充するとともに、多様な外部講師を活用する。手話検定や移動支援従業者養成にも取り組む。

(4) C-step等、就労支援機関・福祉機関と連携し、自立支援コースの生徒や他の障がいのある生徒の進路保障を行う。

※進路未定率のさらなる縮小をめざす。令和8年度には5%以下にし以降維持する。(R3：4.0%、R4：9.6%、R5：13.4%)
- 5 OJTによる教職経験の少ない教職員の育成
- 職員室の大部屋・複数担任制をいかし、相担から学びながら丁寧な生徒指導が行えるようにサポートする。あわせて、校内初任研においては、
担任・教科担当として実践的に活躍できるような研修を行う。

【学校教育自己診断の結果と分析・学校運営協議会からの意見】

学校教育自己診断の結果と分析[令和6年11月実施分]	学校運営協議会からの意見
●概観 ・昨年度、新型コロナウイルス感染症が5類に移行し、あらゆる社会活動の制限がなくなり、学校行事・クラブ活動・自主グループなど生徒の主体的な活動を保障できた。学校生活においても、以前の取り組みに戻すように動いているが、影響はまだまだ大きいと感じる。 ・全体的に肯定回答が増加 ●主な項目（1, 11, 13） 【学校満足度】	第1回（令和6年7月13日（土）実施） テーマ「対話による学校づくり『ルール・メイキング』」 生徒自治会執行部の生徒、教職員、運営協議員が交じる数グループに分かれ、次の2テーマで協議した： ア 生徒アンケートの結果をもとに「松原高校で卒業までにつけたいチカラ」について、イ 「服装における寒さ対策」について。 ○制服を自由化したがまた制服に戻っている。日本の教育において禁止項目が多いことに違和感を覚える。生徒を信頼することなしに進める自治会活動は形骸化する。何を大切にするかを問いつづけることを根幹とし、仲間を支える（隣の

府立松原高等学校

・項目1「学校生活は充実している」88.0%⇒91.2% HR合宿・研修旅行・体育祭・文化祭などの学校行事をコロナ禍前に近い形で実施することができ、生徒たちの学校生活の充実につながっている。 【教育相談・支援】 ・項目9「先生は、生徒の話をよく聞いてくれ、生徒の悩みや相談に親身に応じてくれる。86.4%⇒88.1% ・項目11「先生は、いじめについて私たちが困っていることがあれば真剣に対応してくれる」88.2%⇒89.2% 複数担任制、生徒支援ネットワークなどのシステムをいかし、生徒へ丁寧に寄り添い支援を行うことにつながっている。一層の教育相談支援への充実へとつなげたい。 【授業充実】 ・項目12「学ぶ意欲が上がるように、教え方に工夫している先生が多い。」87.3%⇒86.0（R4年度 79.2%） ・項目13「わかりやすく集中して勉強できる授業が多い」79.3%⇒76.0%（R4年度 72.8%） ・項目14「視聴覚機器やツールを使った授業は興味が持てる」83.1%⇒87.6% 授業設計の視点「GOLDEN」理論を共有しながら、組織的な授業充実の取組を行った。あわせて、昨年度から設置されている電子黒板付き最新プロジェクターの活用が授業充実につながり、満足度の数値が増加した。引き続き、授業充実の取組を進めたい。 【生活指導】 ・項目25「生活指導は適切で納得できる」63.2%⇒68.0% 満足度としては、微増となった。学校全体でルールの一斉化に取り組んでいる。子ども基本法をふまえ、生徒たちの意見を取り入れるためにルールメイキングに取り組むとともに、生徒の納得感を大切に生活指導に組織的に取り組んでいきたい。 【人権教育】 ・項目27「人権や命の大切さを学び「思いやり」の心が身についてきた」94.4%⇒95.6% 本校のLHRにおける人権学習、産社・論理コミュニケーション・課題研究などの教育内容から「優しいチカラ」の土台となる「思いやり」の心が育まれている。引き続き、本校の教育内容の充実を図っていきたい。	生徒が休んでいたらなぜか考える）価値観を大切にしたい。 ○身だしなみによって「見なされる」。「スカートの下にジャージを履くのはみっともない」や「中身が大事だ」という裏腹の考え方があるなか、得られるものと失うものの折り合いをどう付けるかが課題だ。 ○人からどう見えるかでなく、どうすれば安心して学べるかを考える。コミュニケーション力とは、個人の力でなく関係性の中に存在するものだと思う。良い関係性を育む学校づくりをめざすべきだ。 ○就職の有利のためにサークル活動をするといった「未来のために今の一瞬一瞬を棄損すること」に加担しない発想を望む。また、「できる」側の観点で学校が考えていないか気になる。 ○どうあるべきかという理念、子どもの自己決定について、生徒指導提要や子ども基本法において、クラスづくり、人権学習から始めよと言われている。現行の制服（3タイプ）の策定時には、トランスジェンダーの生徒も着やすいという柱があった。今回も、皆が安心して着用できるものを作ればよい。 第2回（令和6年11月15日（金）実施） テーマ「今年度の重点項目の進捗について、成果と課題」 人権・総合学習と教科学習の山場をいかにリンクさせられるかを考えるために、3年間の学びの見取り図を作成する「授業改善に係る校内研修」を、11月に実施した。その校内研修の報告と授業視察を踏まえ、協議を行った。 ○教材、課題の管理が苦手な生徒がいる。プリントによる学習は、ノートを書く時間や負担を減らし学びの質を保障することが目的だ。予算があった頃に1年分のプリントを予め製本し配付していた。その時期の学力は高かった。また、サイズをA判かB判か何れかに統一するのがよい。 ○子どもたちの時間の感覚は変化している。SNSは短時間である。授業は構造も長さも、集中を保てる工夫が必要である。 ○全国でカリキュラム・オーバーロードの問題が指摘されているなか、松原高校は「居場所」であることと「学びの場」であることを両立させようとしている。率先して何かを捨て、焦点化を始めてはどうか。 ○「働き方改革」とは、時間短縮ではなく、労働の質を高めることである。また、自分たちで進めるものである必要がある。そのためにどうすればよいかを考える。 第3回（令和7年2月1日（土）） ○課題研究では、可能性をどこまでも掘り下げて、信じ切っている姿に感動した。私達一人ひとりの大人が問われている。総合学科の倍率が低くなっていることに愕然とした。難しいこと、大変な取り組みをしている学校の倍率が低くなっている。ただその流れに合わせるだけではダメで、大人は在り方を考えていくべき。 ○松原高校は将来に生きていく力を育てる学びをしている。倍率にはかえってこないが、こんな学校を大切にしていけないといけない。 ○答えがない問いに対して、教員が伴走して一緒に考えていく。仲間も一緒に考えている。そんな姿が松原高校では印象的である。 ○課題研究では原稿も見ずにしっかり話せていた。松原高校で3年間しっかり学べていたことを実感した。 ○志願者数について、この間、閉校していく学校は実は90%の生徒が「入学して良かった」と思っている。
--	--

3 本年度の取組内容及び自己評価

中期的目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標	自己評価
-------	----------	-------------	------	------

府立松原高等学校

1 スクールミッション・スクールポリシーにもとづく教育活動の進化と学習者主体の授業実践	（１）校内の授業充実の取り組み ア 学習者主体の授業実践 イ ICT を活用した基礎的環境整備、「１人１台タブレット」の活用による学びの充実 （２）主体的な学びプログラムの構築と実践 ア 「産業社会と人間」等「ライフワーク」の深化 （３）通級指導教室および自立支援コースの授業の内容創造 ア 通級指導教室の授業「ライフスキル」の充実	（１） ア 授業設計の視点「GOLDEN」理論にもとづいて単元を逆向きに設計し「問いの変換」を組み入れながら学習者主体の授業を展開する。 イ 校内 ICT 環境の整備を図り、１人１台端末の授業における活用の充実を図る。 （２） ア・「産業社会と人間」、「課題研究」、「論理コミュニケーション」など松高総合学科「ライフワーク」によって学びのベースとなる「学び方を学ぶ」（メタ認知の力）を実践する。 （３） ア・通級指導教室の授業「ライフスキル」の内容深化を専門家を交えた通級チームによって行ない、ソーシャルスキルの獲得と社会的自立を促進するカリキュラムの充実を図る。	（１） ア 「教え方に工夫している先生が多い」の肯定的回答を 80％以上を維持する。（R5：87.3％） イ 生徒自己診断結果 ICT による授業への満足度の維持、向上。（83.6％） （２） ア 学校教育自己診断生徒用「自己表現力」（89.1％）、 「コミュニケーション力」（87.1％）、 「論理コミュニケーション力」（82.8％）の維持・向上。 ・総合学科アンケート「学んで良かった」（98.7％）の肯定的回答を 90％以上を維持する。 「産業社会と人間」は将来の参考になった」（88.6％）の肯定的回答を 85％以上を維持する。 （３） ア・通級指導を受けた生徒の満足度 90％以上をめざす。（100％）	（１） ア 「授業展開」（86.0％）（○） イ 「ICT の活用」（87.6％）（◎） （２） ア 「自己表現力」（91.8％）（◎） 「コミュニケーション力」（91.6％）（◎）、 「論理コミュニケーション力」（86.9％）（◎） ・総合学科アンケート「学んで良かった」（100％）（◎） 「産業社会と人間」は将来の参考になった」（86.6％）（◎） （３） ア 通級指導を受けた生徒の満足度（100％）（◎） 課題 昨年度より、多くの項目で評価が上がった。引き続き、授業、ライフワーク授業などの充実の取り組みたい。
	（１）生徒主体の人権教育プログラムづくり ア 信頼できる居場所づくり イ 当事者や生徒どうしの対話を重視したピアエデュケーション ウ ２年次海外研修旅行等による異文化理解 エ 部活動・自主活動を充実と地域への出前授業。	（１） ア １学年のHR 合宿などによる居場所づくりによって、自己開示ができる関係づくり。 イ 当事者や生徒どうしの対話を重視したピアエデュケーション実践の推進 ウ オンラインなどで海外との交流で多様性尊重の態度を育む。 エ 部活動の活発化を促し、中学校との連携を深める。「仲間の会」、「るるく」、「ピアカウンセラー」「ピースワーク」など自主活動を充実させ、小中学校等の出前授業等を行う。	（１） ア・自己診断における「学校生活が充実している」（88.0％）の肯定的回答を 85％以上を維持する。 同「自分のクラスの居心地がいい」（84.5％）の肯定回答を 80％と以上を維持する。 イ・同「様々な人権や命の大切を学んだ」の肯定的回答（94.4％）の肯定回答を 90％以上を維持する。 ウ・オンライン交流による満足度 80％以上を以上を維持する。（オンライン交流 86.4％） エ・障がい理解やエイズ、国際理解教育に関する小中学校と連携した活動の維持。（9回）	（１） ア 学校生活が充実している（91.2％）（◎） 自分のクラスの居心地がいい（88.2％）（◎） イ 様々な人権や命の大切を学んだ（95.6％）（◎） ウ ２年海外研修旅行（韓国）のアンケート結果における「今回の旅行は、韓国の文化（異文化）に触れる良い機会になりましたか？」の肯定回答（87.4％）（◎） エ 障がい理解やエイズ、国際理解教育に関する小中学校と連携した活動（10回）（◎） 課題 引き続き、学校生活が充実している、自分のクラスの居心地がいいの肯定率の高水準を維持している。行事に楽しく参加できるなど、クラスが安心できる居場所づくりにつながる取り組みを今後も実施していきたい。 新型コロナが５類になり、出前授業等も復活し、小中学校と連携する機会が増加した。

府立松原高等学校

3 生徒支援と地域連携による信頼される学校づくり	(1) 支援ネットワークの体制づくり ア教育相談委員会の機能充実 イ課題早期発見フォローアップ事業 ウ基本的な生活習慣の確立 (2) 障がいのある生徒支援 ア コーディネーター会議を毎週開催 イ 高等学校支援教育力充実事業の支援教育サポート校 (3) 各中学校や地元の進路関係組織との連携と学校からの情報発信	(1) 生徒指導、生徒支援について全教員が協力し、指導と支援の一体化と支援ネットワークづくりを行う。 ア・教育相談委員会を毎週開催し、生徒の情報を共有し、周知を図る。ケース会議を通じ SC、SSW や福祉機関との連携を図る。 イ・課題を抱える生徒フォローアップ事業等を通じ、地域 NP0 と連携し、「松高版子ども食堂」など生徒への居場所の提供と生徒たちのエンパワメントにつながる機会を保障する。 ウ・遅刻・欠席件数の減少のため遅刻指導週間を実施する。 (2) 自立支援コーディネーターを中心とする障がいのある生徒支援 ア・コーディネーター会議を毎週開催し、自立支援生、通級指導教室の生徒をはじめ障がいのある生徒のトータルな支援を行う。 イ・高等学校支援教育力充実事業の支援教育サポート校として、教育実践の一層の充実を図り、他校への発信と支援の充実に取り組む。(通級教室新規設置校へのアドバイスの実施) (3) 各中学校との連携を深め、成果を発信する ア・生徒情報交換の機会を充実する。 イ・各中学校区フェスタへの参加。地域イベント等への参加 ウ・総合学科の魅力をより発信できる学校説明会等や発表大会の開催と内容の深化。	(1) ア・自己診断「生徒指導への理解度」(生徒 63.2%、保護者 63.9%)、同「悩みや相談に親身に応じている」(生徒 86.4%, 保護者 80.6%) の維持、向上。 イ・「松高版子ども食堂」年間 5 回以上開催する。(10 回) ウ・遅刻、欠席の 3 % 減少 (遅刻 6354 件 欠席 10036 件) (2) ア・コーディネーター会議の開催 (学期に 1 回) イ・支援教育関係の訪問や研修を年間 5 回以上実施する。(7 回) (3) ア・中学校連携の維持、充実。(中学校関係研修、進路説明会等に計 10 回。中学校訪問のべ 50 校) イ・出前授業やフェスタへの生徒参加回数を維持する。(10 回) ウ・学校説明会での中学生のアンケート回答 : 大変参考になった (78%) の肯定率を 78% 以上とする。	(1) ア「生徒指導への理解度」(生徒 68.0%、保護者 63.2%) (△) 「悩みや相談に親身に応じている」(生徒 88.1%, 保護者 77.6%) と対象である生徒の数値が増加している。(○) イ「松高版子ども食堂」11 回 (◎) ウ遅刻、欠席の 3 % 減少 (遅刻 8683 件 欠席 12492 件) (△) (2) ア コーディネーター会議の開催時間割の中で、週 1 回の会議が定着している。(◎) イ 支援教育関係の訪問や研修 旧 3 学区の支援教育コーディネータ連絡会を実施した。自立支援、通級の取り組みの発信はできている (7 回) (◎) (3) ア中学校関係研修、進路説明会 10 回 (○) 中学校訪問 (50 校) (○) イ教員の出前授業やフェスタへの生徒参加 (10 回) (○) ウ学校説明会での中学生のアンケート回答 : 大変参考になった (67%) (△) 課題 生徒の納得感を得ながら全校一致した体制で生活指導に取り組む必要がある。複数担任制のシステムをいかし、生徒の相談支援の充実につなげていきたい。 出前授業・フェスタ・自主活動への参加が復活し、地域連携の取り組みが戻りつつあり、引き続き生徒の自主的活動を支援していきたい。
4 総合学科としての多様な進路実現に向けたキャリア教育の推進	(1) 進路保障のためのキャリア教育の推進	(1) 多様な進路の保障と地域で活躍する人の育成 ・総合学科のシステムを生かしたキャリア教育の推進と人権教育にねざした進路保障。	(1) ・生徒の就職内定率 90% 以上を維持する。(100%) ・進路未定率を下げる。(13.4%) ・学校教育自己診断でのキャリア教育の肯定的な回答 (86.7%) を 80% 以上を維持する。	(1) ・生徒の就職内定率 (100%) (◎) ・進路未定率 (14.0%) (△) ・キャリア教育の肯定的な回答 (90.0%) (◎) 課題 引き続きマッチングが適切に行えるよう面談を丁寧にするとともに、進路未決定を減少させる。

府立松原高等学校

5 OJTによる教職経験の少ない教職員の育成と働き方改革	(1) OJT による教職経験の少ない教職員の育成 (2) 働き方改革の実施	(1) ア・松高ハンドブックを改訂し、授業・生徒指導・集団育成において実践的に活躍できる羅針盤とする。 イ・職員室の大部屋・複数担任制をいかし、OJT として相担から学びながら学習者主体の授業実践、丁寧な生徒指導・集団育成において実践的に活躍できるようにサポート。 ウ・校内初任研において、担任・教科担当として実践的に活躍できるような研修実施。 (2) 府の働き方改革の 10 項目、職員会議ノンペーパー、時間外電話なし、定時退庁日などの取り組みの着実な実施	(1) ・松高ハンドブックの改訂と共有 ・初任者教員の校内研修を時間割に組み入れ定期的に実施 (2) 府の働き方改革方針の 10 項目の着実な実施 定時退庁者（65.9％）を 75％以上をめざす。	・松高ハンドブックの改訂について、分掌会議を 10 回、行事予定に入れた。（△） ・校内の初任者研修で複数担任制の研修（2 回）。（○） 全体的には、校内初任研を 310 時間程度実施。 ・定時退庁日に退庁できる環境はできつつあるが、55.6％である。（×） 課題 研修等を通じて、生徒へのサポートを大切にするため職員室の大部屋体制や複数担任制についてのシステムの共有を行った。府の働き方改革の 10 項目を着実に実施しつつ、より一層の業務改善に臨む。
---------------------------------	--	---	--	---